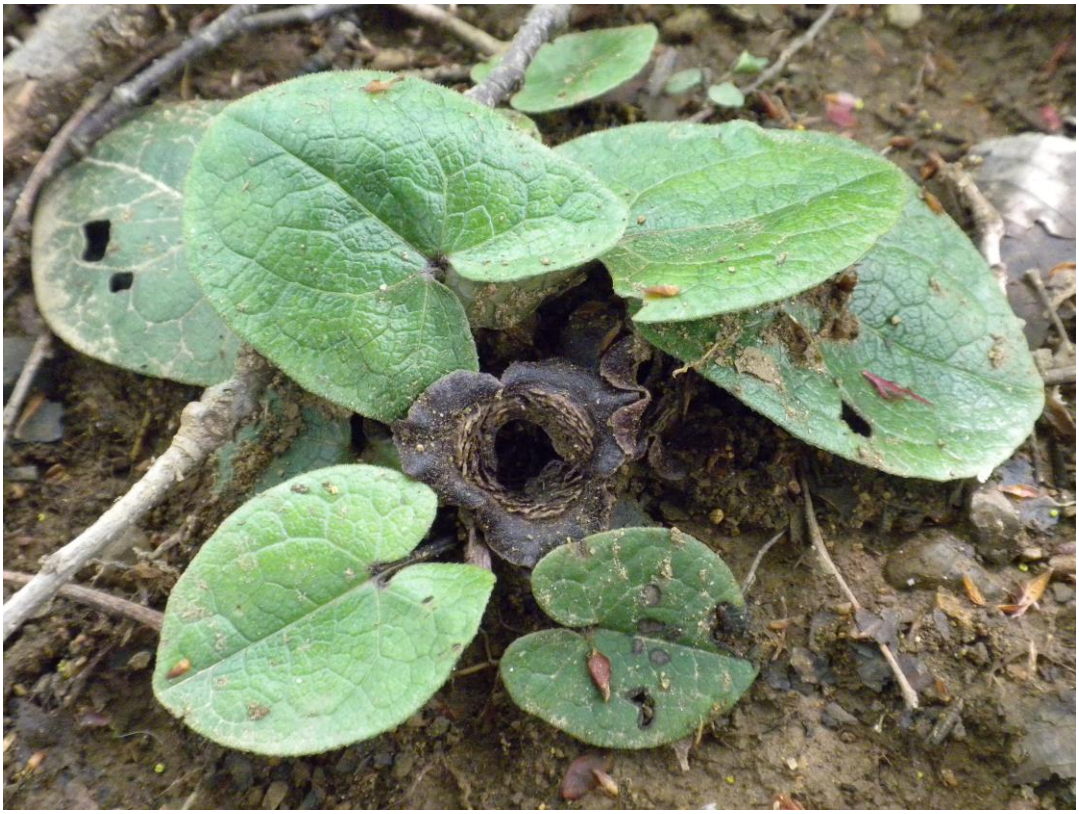
赤米ニュース

第 297 号
（2021 年 12 月 31 日）



東京赤米研究会

〒186-0003　東京都国立市富士見台 4-11-13 メゾン国立 201　長沢方（TEL042-577-6855）

おしらせ----------2372
おたより----------2375
国分寺市の稲作農具（Ⅷ）----------長沢利明 2376
表紙解説：江戸東京ゆかりの植物⑫―タマノカンアオイ―　---------- 2378

おしらせ

●当会事務局が移転しました

東京赤米研究会の事務局所在地が、このほど移転することとなりました。移転先住所は下記の通りです。なお電話番号は今まで通りで、変わりません。よろしくお願い申し上げます。

（移転先）
〒186-0003　東京都国立市富士見台 4-11-13
メゾン国立 201　長沢方（℡042-577-6855）

●再度会員登録の更新のおしらせ

前号でもお知らせしましたが、当会では例年通り、恒例の会員再登録・更新の手続きを、現在おこなっております。よろしくご協力いただければ、さいわいです。本誌『赤米ニュース』は、購読料会費というものがないかわりに、例年１年間単位で会員の皆様に、本誌の継続配布希望の有無を、意思表示していただくことになっております。その手続きのやり方は、次の通りです。

すなわち明年１月以降も、『赤米ニュース』の配布を引き続き希望される方は、本年中にその旨を一言、本会までご連絡下さい。連絡方法は、葉書でも手紙でも電話１本でもかまいません。どうせですからその際に、本年の赤米稲の作柄状況やご感想、失敗談などのエピソードも、ついでにお知らせ願えればとも存じます。明年１月号からは、配布継続の意思表示をされた方々にのみ、本誌を継続発送させていただくことになりますので、この手続きを怠りますと、発送が打ち切られることになります。ぜひご注意願いたいと思います。お手数をおかけしますが、何とぞよろしくお願い申し上げます。

●本年の新嘗祭

収穫の秋も終わりましたので、例年であればこの時期、国分寺市内の各神社で収穫を感謝するための新嘗祭の祭事がおこなわれるはずだったのですが、今年は例年通りではありませんので、お気をつけ下さい。まず西恋ヶ窪の熊野神社ですが、11 月 23 日（火）に一応、新嘗祭の神事はおこなわれます。ただし、コロナ禍はまだ収まっておらず、これから感染の第６波がやってくる恐れもあるため、慎重な対応を取ることとなりました。一般信徒の招待はこの際、断念し、宮司と氏子役員のみで、簡略な形で神事のみをとりおこなうことになったとのことです。

一方、本町の本町南町八幡神社では例年通り、国分寺赤米プロジェクトが中心となって、11 月 27 日（土）に新嘗祭神事と第３回赤米祭を挙行することとなっております。くわしいことは、国分寺赤米プロジェクトの坂本浩史朗代表におたずね下さい。

●国分寺九小で赤米稲刈り

本年 11 月４日（木）、国分寺市立第九小学校で、５年生２クラスによる校内での赤米稲

自分たちで収穫した赤米の、擂り鉢を用いての籾すり方法を教えてもらいました（国分寺九小にて）

刈りがおこなわれました。九小では赤米セミナーレの指導のもと、５年生児童が大型プランターを10個ほど各教室のベランダに並べ、初めて赤米作りにチャレンジしていたのですが、春にまいた種が発芽して、その後、苗が大きく育ち、秋には稲穂が稔って、収穫を待つばかりの状態になっていました。

児童らは夏の間、みんなでミニ田んぼの水やりを続けてきたのですが、夏休み期間中はどうしても土が乾き過ぎてしまうこともあったようで、稲穂の稔り方はいまひとつでしたが、それでも結構、穂が垂れていて、何とか収穫にまでこぎつけることができたのは、児童らの日々の努力のたまものです。

本日の稲刈りには、九小校長の矢島英明先生、2 クラスの担任の先生方も校庭に勢揃いされ、赤米セミナーレからは大石・猪浦・野沢・富村・長沢の５名も参加され、児童らの指導にあたられました。校庭に並べられたプランターの前で、まずは５年１組から稲刈りを始めますが、最初に赤米セミナーレ代表の大石さんから挨拶があり、次に長沢さんによる石包丁の使い方についての説明がなされた後、いよいよ児童らが手に石包丁を持って稲刈りに取りかかります。「切れた！切れた！」の歓声があがり、児童らは上手に赤米稲の穂刈りを進めていきます（写真参照）。

セミナーレのメンバーらは班ごとに散らばり、児童らに懇切丁寧なアドバイスをおこなって、ともに楽しく作業をサポートしました。

すぐにすべてのプランターの稲穂を刈り終わり、残った稲藁を根刈りしてプランターを片付け、残されたゴミなどを掃除して、稲刈り作業は終了しました。次に、すでに刈り取って脱穀と乾燥とを済ませてある籾を用い、播り鉢とスリコギを用いて籾摺りをおこないます（写真参照）。大石さんの実にわかりやすい説明と模範演技に、児童らは熱心に聞き入り、自らもスリコギを手に取って籾摺り作業にさっそく挑戦です。籾が割れて中から赤茶色の玄米が飛び出すたびに、「本当に赤いお米だ！」と、みんな感動していました。地面にこぼれ落ちた籾粒を拾い、爪で殻を剥いてみる児童もおり、その玄米を家に持ち帰って通常米と混ぜ、お母さんに赤米飯を炊いてもらって、自分も食べてみるのだという児童もいました。おおいに結構なことで、ぜひやってみてもらいたいと私たちも思いました。

その後は引き続き、5 年 2 組が同じ作業をおこない、午前 10 時半にはすべて終了しました。五小では来年度も、赤米作りをおこなうとのことです。

●赤米会の青空藁細工教室

国分寺赤米会では、初めてのこころみとして本年 11 月 3 日（水）、藁細工教室を開催しました。会場はいつもの、武蔵国分寺跡の赤米畑です。収穫を済ませた畑の脇の空き地にブルー・シートを敷き、10 名ほどの会員が集って、晩秋の青空の下、楽しい野外藁細工教室となりました。指導されたのは、市内在住の藁細工研究家で東京農工大学 OG の中田真紀子さんです。赤米畑の脇には先日の稲刈り後に残された大量の赤米稲の藁が積み上げられており、腐るほど藁があり余っているので、いくらでも使えます。

トウガラシの飾り物を作っています

籾摺り体験もおこないました

まずは、藁の下ごしらえから始めますが、ひとつかみの藁束を手でよくすぐってハカマ（稲の葉）をていねいに取り除き、茎（稈）だけにします。次にその藁束を水に沈め、30 分間ほど浸けておきます。その間に、今度はトウガラシの魔除け飾りを作ります。何本ものトウガラシの実を稲藁で編み込んで連ねていくのですが、これを戸口などに吊しておくと、魔物の侵入を防ぐことができるといわれており、必要な時にはそこから適宜、トウガラシを抜き取って、料理などに使うこともできます。4 本の藁を交互に編み込んで、トウガラシをつないでいくのですが（写真参照）、中田さんのわかりやすい説明により、誰もがすぐに編み方を覚えて、上手に作品を作り上

げていきます。この日、用いたトウガラシは収穫したばかりで、まだ青かったのですが、吊しておくうちに赤く変色していくのだそうです。

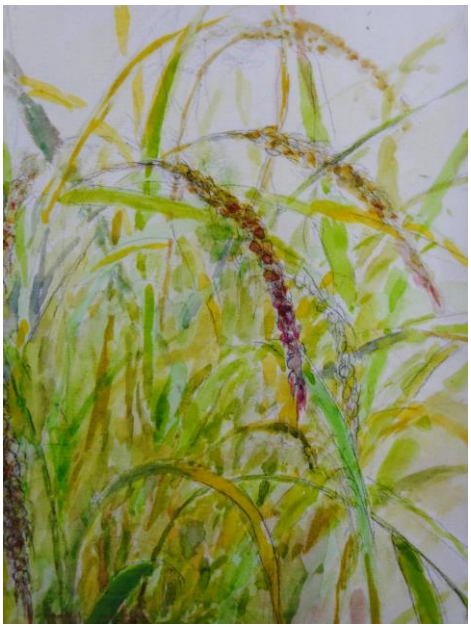
そうこうするうちに、先ほど水に浸けておいた藁束がしっとりと水を吸い、よい状態になりましたので、今度はそれを用いて縄をないます。藁束の水を切り、藁槌でトントンと叩くと茎がやわらかくなり、細工がしやすくなりますので、それを用いて皆で縄をなっていきます。初めての体験に、誰しも苦戦していましたが、すぐにコツをつかみ、全員が立派な縄をなえるようになりました。

その後は、擂り鉢を用いての籾摺り作業などをおこない（写真参照）、正午に解散となりました。赤米畑の隣家の道林さんご夫婦の、手作りの青梅ジュースと赤紫蘇ジュースも振る舞われ、実においしくて誰もがおかわりをしていました。道林さん、いつもありがとうございます。赤米会の活動も、年内はこれで終了となります。

おたより

●赤米の穂が出ました（高橋寿子）

秋晴れの日、友人を誘って我家の庭の古代米のスケッチをしていました。その時、シジュウカラの家族づれが庭木の間からこちらへやって来て、私たちを見て戻って行きました。この時、穂のあちこちが白いもみがらになっている訳がわかりました。籾をむいてみると、中はまだ白いので、あと 10 日位してから再チェックして、刈り取る事に致します（10/17：東京都国分寺市）。



●スズメに食われました（野沢森生）

先日は『赤米ニュース』第二九六号、お送り頂き有難うございます。いつも栽培マニュアル参考にさせて頂いておりましたが、先月号の「稲刈りについて」に記載されていました防鳥ネットを、買いに行こうと思っていた矢先にごっそり（半分以上、たぶんスズメに）無くなっていたことが判明、せっかく「赤米栽培記」まで載せて頂きながら、大変面目ない結末となってしまったのです。スズメなど見かけないと思っていましたが…とても残念ですが、仕方ありません。気を取り直し、明春に再チャレンジしていこうと思います。会員登録の更新のお知らせ有難うございます。いろいろお手数おかけするばかりで恐縮ですが、継続させて頂きたく、どうぞよろしくお願いいたします（10/25：東京都国分寺市）。

●引っ越ししました（長沢利明）

私の住む国立市内のアパートがこのたび

取り壊されて、戸建て住宅が建てられることとなり、追い出されてしまうこととなりました。いきなり言われても困るのですが、やむなく転居を決め、同じ国立市内の富士見台 4 丁目に引っ越しすることとなりました。子供らももうすでに独立しており、老夫婦のみの 2 人暮らしなので、新居はせまいアパートにしたのですが、蔵書類はとても全部を置けないので、大量に処分しました。トラック 1 台分ほどの量を捨てたのですが、よくもまあ、これほどたくさんの本を今まで貯め込んでいたものです。とても名残り惜しいのですが、仕方ありません。赤米の標本類は、武蔵国分寺跡資料館に全部寄贈させていただきました。新しいアパートは、南武線矢川駅の目の前です（11/16：東京都国立市）

国分寺市の稲作農具(Ⅷ)

長沢　利明 2　**耕起作業と農具・つづき**一方、陸田にあっては、種籾が直播きされるので、いつでも播種ができるように、畑の土を細かくならしておかねばならない。戦前の恋ヶ窪での本田の耕起作業の場合、おおよそ 4 月末にマンノウを用いて人力で荒っぽく田を耕した後、スキ（犂・馬耕機）を馬に曳かせて土を細かくし、5 月末にオンガ（馬鍬）を馬に曳かせて代掻きをおこなっていたが、オンガを用いて田の土をさらに細かくする作業をスキナオシ（鋤き直し）とも呼んだ。馬喰から馬を借りるのは 2 回で、1 回目はスキを用いての耕起、2 回目はオンガ（マ

図 9　榎戸新田のその他

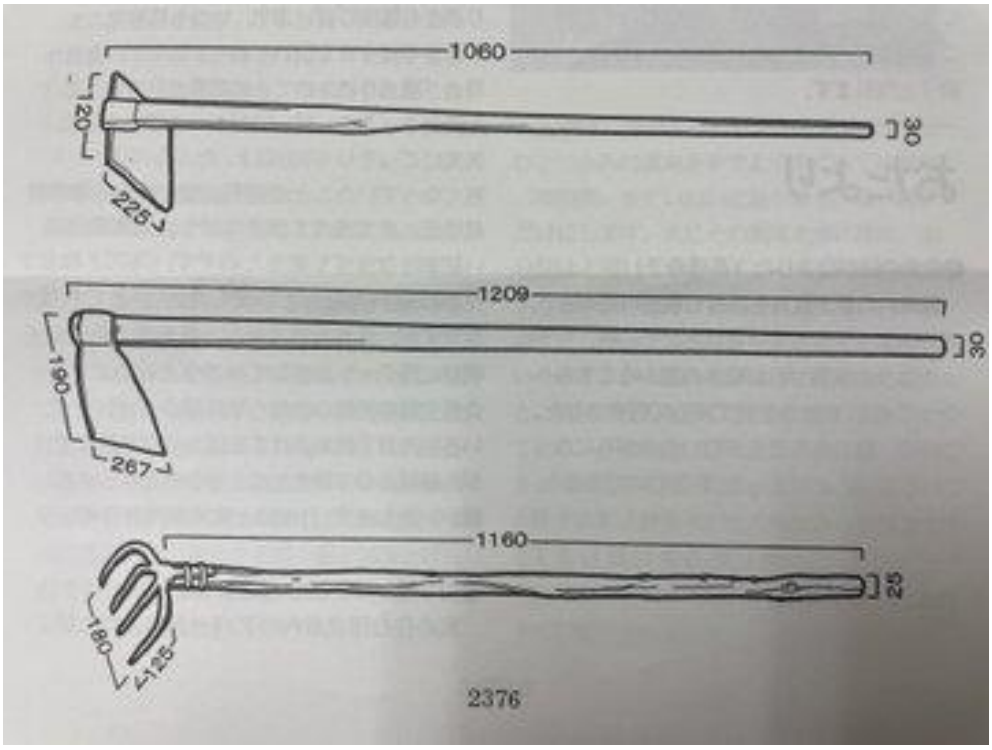
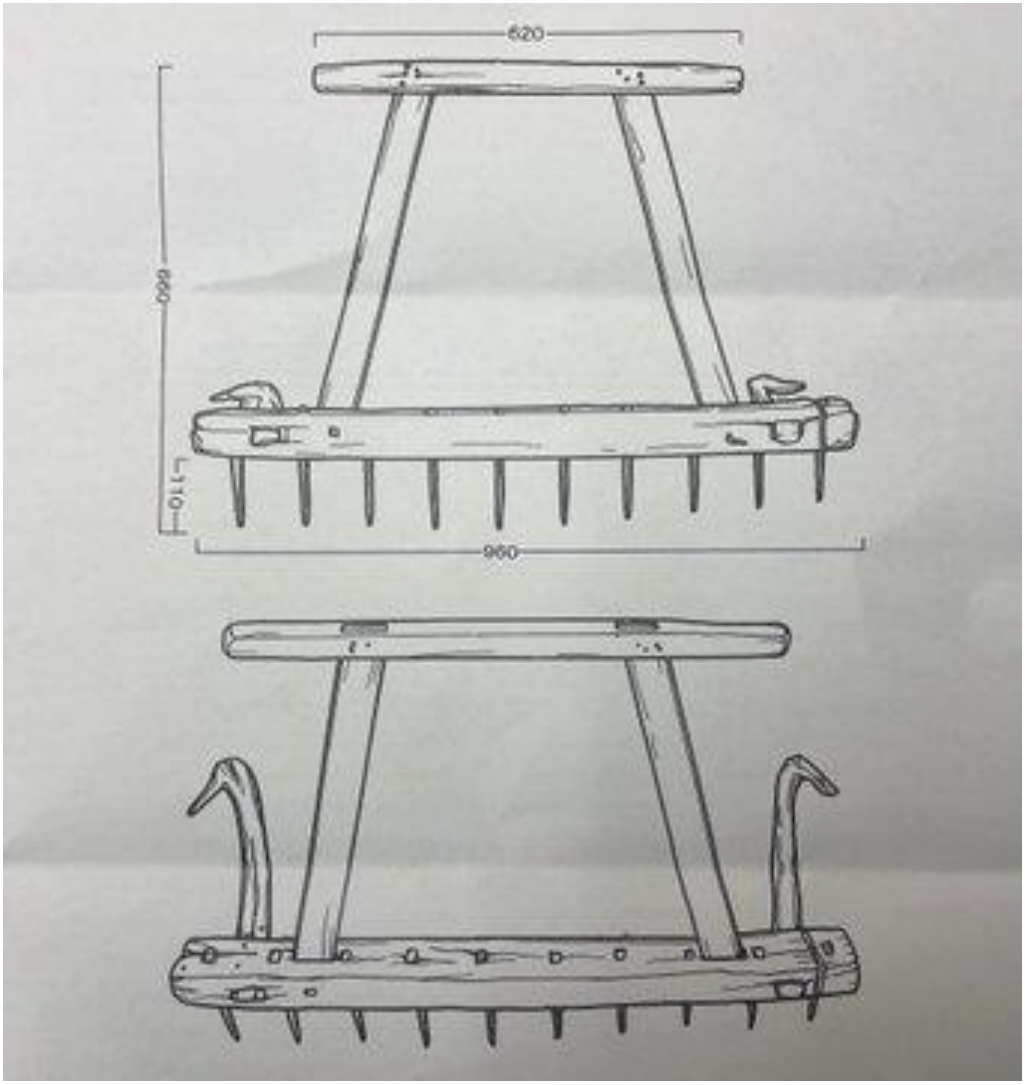


図10　恋ヶ窪のマンガ

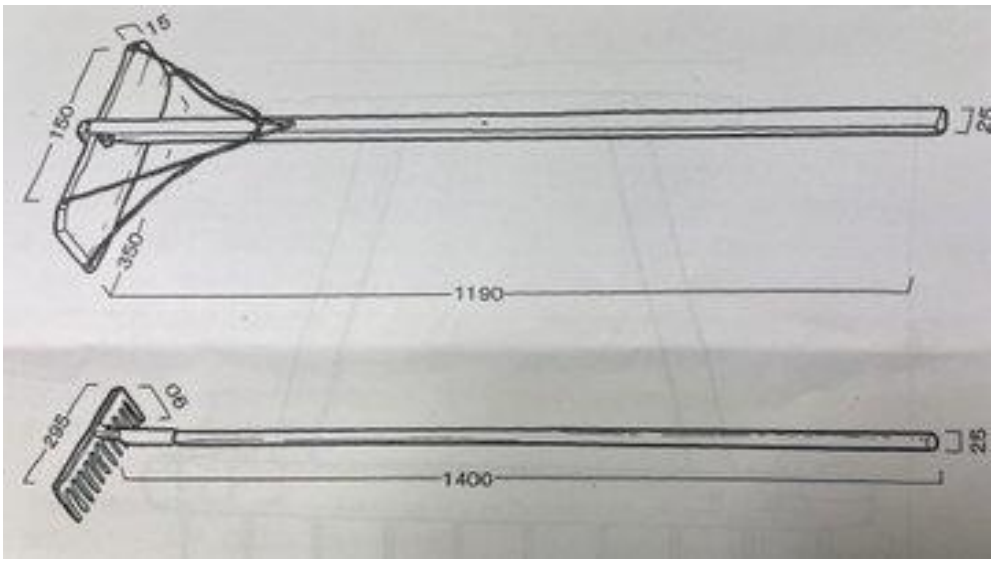


ンガ）を用いてのスキナオシの時であった［榎本・松本, 1995：p. 116］

3　苗代作り・定植作業と農具

以上のプロセスを経て、いよいよ稲の植えつけ作業が始まる。水田での稲作であれば、まずは4月初旬に用水の川さらい作業がおこなわれ、4月半ばには苗代（ナエマ）作りが

図11　エブリ（榎戸新田）とレーキ（下谷保新田）



なされ、5 月初旬には苗代への播種となる。播種作業のことを、一般に「種ふり」と称している。あわせて本田の最後の仕上げ作業も、同時になされることになっている。

水田にせよ、陸田にせよ、最後の仕上げは耕土の表面を平らにならすという作業であったが、その時に用いられる農具がエブリ（柄振り）であった。エブリとは、木製の角材をＴの字型に組み立てたシンプルな農具で、土ならし具であった。高校野球の球児たちが、グラウンドの整備にいつも用いている、あのＴの字型をした用具を思い出せばよい。俗にそれをトンボと呼ぶのは、Ｔの字型の用具の形が、空を飛ぶトンボの形に似ていることから来ている。田畑の土の表面を平らにならすトンボが、エブリなのであった。

近年では西洋式の熊手を用いて、土や泥をならすこともなされるようになり、それをレーキと呼んでいるけれども、レーキとはrakeであって、「熊手」という意味の英語であった。図11には、エブリとレーキの実測図を掲げておいた。　（つづく）

［表紙解説］江戸東京ゆかりの植物⑫

—タマノカンアオイ—

カンアオイはウマノスズクサ科の植物で、地方ごとにいろいろな亜種に分類されているが、関東地方南西部の丘陵地帯にのみ自生する特産種を、タマノカンアオイ（多摩の寒葵）と呼ぶ。偉大な植物学者として知られる牧野富太郎博士により、多摩地域で発見されたので、タマノカンアオイと名づけられた。その学名を *Asarum tamaense* Makino というが、*tamaense* とは「多摩産の」という意味だ。春の4～5 月に花を咲かせるが、花弁のない顎片のみの花で、しかも半ば土に埋もれるように咲くため、まことに目立たない地味な花だ。葉柄が緑色ではなく、褐色～暗紫色をしている点が特徴で、他の亜種と区別することができる。狭山丘陵や多摩丘陵の広葉樹林内を散策してみれば、日陰の草むらの中に、地を這うようにしてひっそりと生えているタマノカンアオイを見ることができる。